

夢野久作「氷の涯」論

——ニーナが切り裂くもの

1 はじめに

夢野久作という作家の特徴の一つに、テキストに描かれる舞台の多様さが挙げられる。時にウラジオストク、時にセントルイス、時にヴェルダン、時に行き先不明の船内等、数を挙げればきりがない。そのような特質を持つ作家を、江戸川乱歩は「異常的でない特殊な感情を作品に表現」した「大きな意味の異国趣味者であると思ふ」と評している。夢野久作の創作活動を支えたのは友人、父・杉山茂丸の周りに集まってくる人々、そして大量の資料だった。夢野久作の妻・杉山クラと、長男・杉山龍丸は谷川健一との対談^②において、シベリア出兵に材をとった「氷の涯」を例に挙げ、次のように述べる。

谷川 『氷の涯』などを読みますと、実際向こうにいらしたんじゃないかと思われるほど詳しくて、生々としたところがありましてね。あれはやはり……。

野作浩隆

クラ あれはやはり、あそこに行った人にずいぶん根掘り葉掘り尋ねましてね。

龍丸 それからいまうちに残っていると思いますが、ハルピン付近からシベリアの写真がたくさん残っています。

谷川 おじいさん（論者注 杉山茂丸を指す）からお聞きになった話は……。

龍丸 ええ、それもありますね。あの地区の黒龍会なりそれから朝鮮にいた林駒生、そういう人たちが日露戦争やあの時代にずいぶん向こうに行ってますから。けど、『氷の涯』なんかの素材になったのは、庄林さんといって、シベリア出兵に行った人から聞いた話、それから庄林さんからもらったのか、自分でいろいろ集めたのか知りませんが、シベリア出兵に関する資料、写真、絵葉書類——これは小さい手さげいっぱいあります。

しかし、西原和海^③の指摘によれば、「作家自身にはほとんど外国旅行の経験」はなく「これまで知られる限り、久作が実際に海

を渡つたのは、大正十五年（一九二六）八月下旬、朝鮮の釜山に叔父・林駒生を訪ねた時くらいであったという。夢野久作は、友人からの話、「小さい手さげいっぱい」の「資料、写真、絵葉書類」を用いて、実際には行ったことのない土地を紙上に生々しく描いてみせた。

本稿が論じる「氷の涯」⁴は、そうした作家の態度が色濃く反映された作品の一つだ。「氷の涯」は、「僕」上村作次郎陸軍歩兵二等卒が、知人と思しき「君」に宛てて書いた「遺書」という形式のテキストだ。大正八年八月、「欧州大戦」に端を発するシベリア出兵に召集され、ハルピンへと派兵された「僕」の生活は「退屈」なものであったが、ある日、日本軍人の「星黒主計」と「十梨通訳」が「公金十五万円」を盗みだし、逃走する事件が起こる。「退屈」しのに「僕」は事件を「推理」していくが、「白軍の総元締」オスロフの養女「ニーナ」に命を狙われることによって、事件の渦中へ巻き込まれていく。ニーナに命を狙われた日の翌日、逃走していた「十梨通訳」が盗み出した「公金十五万円」の一部を持ってハルピンへと戻ってくる。「十梨通訳」は、自分は脅されていただけであり、犯人は「星黒主計」であるという。しかし「僕」は「偶然」目にした「二十円札」の裏面について。「赤インキの斑点」によって、十梨の話が嘘であることを見破る。「僕」は全ての事件の黒幕は「大料理店、兼、待合業「銀月」の女将」富永トミであると睨み、彼女のもとへと向かうが、結局「何もかも解らなく」なり、トミを殺害してしまう。トミを殺害後、日本軍人のなかで「アンタが一番好きになつちやつた」というニーナに脅され、松花江に浮かぶボートに乗せられた「僕」は、「形

容も想像も及ばない無鉄砲なジプシー女の、断乎たる決心に引きずられて行く」ようにして、ハルピンから逃亡する。「日本軍、白軍、赤軍」からの逃亡生活の末、ウラジオストクに辿りついた「僕」は全てをあきらめきっていたが、ニーナが提案する、ウィスキーを飲みながら凍結した海上を「何処までもく沖へ出」て、「ドウなつてゐるか誰も知らない」地平まで馬車を走らせる「ステキな死に方」を聞くに及び「何も忘れてこの遺書を書き始め」る。しかし、ニーナの樂觀的な言葉によって「遺書」を書く「此のペン」を止めた「僕」は「若し水が日本まで続いて居たらドウスル……」と睨みつけるが、その言葉を聞いたニーナは、持っていた編棒を「ゴチャ／＼にして笑ひこ」ける。

戦後、夢野久作をいち早く議論の俎上に載せた鶴見俊輔は、「氷の涯」「犬神博士」「ドグラ・マグラ」といった作品を取り上げ、その背後に父茂丸から受け継いだ「自由民権の拡大とアジア解放とを求めるインターナショナルな視野をもつ民族主義者であり、国粹主義者・国権主義者への転向前の民族主義者」の姿をみる。

夢野久作の推理小説は、五・六歳の少年（犬神博士）、国籍リダツ者（氷の涯）、狂人（ドグラ・マグラ）による犯罪のナゾトキの過程をえがく。社会から規定されている自分の状態からぬけだす人の立場、社会から、まだ自分を規定されていない者の立場が推理の軸になっている。

（中略）

国家の規定する自分、会社、学校、家の規定する自分よりも深くに、おりにてゆくと、祖先以来の民族文化によってつく

られた自分があり、さらにその底に動物としての自分、生と命、名前なき存在としての自分がある。そこまでおりていって、自分を現代社会の流行とは別の仕方でも再構成し、新しく世界結合の方法をさがす。そこには、民族主義をとうしてのインターナショナルイズムの道がある。民族のたましいの底のさらに名もない部分。大陸浪人の考え方の底にあったのは、このような徹底的唯名論である。

「水の涯」に、国家・政治という、一個人を規定するものからの逃亡を読んだ鶴見の指摘は、由良君美の、テキストには「自己証明の抹殺による全く新しい第二の自我の可能性への賭けという主題」があり「国際的デラシネへの脱出に賭ける必然が跡付けられられている」との指摘や、多田茂治の「汚濁に満ちた世界から馬糞で夜の海へ乗り出していく二人の前には、もう国境はありません。民族はありません。生死の境すらありません。絶対的自由の天地です」との指摘に引き継がれる。その一方、水澤周の「余計なこと」であり、「水の涯」の眼目は「最後の、ウイスキーをのみつつ満月の、氷の海に馬ソリで乗り出そうという思いつきの美しさにある」という指摘を導きもするが、鶴見の論が、解釈の一つの指標となったことは間違いない。

一方、鶴見の指摘を踏まえたくて、異なった角度からテキストに切り込んでいるのは、種村季弘、川崎賢子、佐藤泉の論だ。三人の論者は、「僕」とニーナが、凍結した海上へと逃走していくラストシーンを主に考察している。まず種村の論を検討し、川

崎、佐藤についてはそれぞれ、後の章にて取り上げたい。

種村は、「夢野久作の『探偵小説』が特異な」ところとして「犯人の無辜」が裁かれる点を挙げる。「結果（宣告）があつて、はじめて原因（罪）がある」という因果の逆転した世界、もしくは「それすらあるいはない」世界を論の俎上に載せ、次のように指摘した。

そもそも悪事はそれと目立つだけの限定性があるので尻尾をつかみやすい。ところが無垢にはつかむ尻尾がない。尻尾を出しようにも出ず尻尾がないから始末におえない。ああともこうとも見え、それが相手には（無垢なるもの）変装と見えるゆえんなのだ。とまれ夢野久作の主人公たちは、尻尾をつかもうとするとその度にくるくると何かに変装し、カムフラージュの保護色にまぎれる昆虫のように目をくらませて逃走してしまう。

「くるくると何かに変装」し、逃走し続ける。作家である夢野久作においても同様の態度を指摘できるだろう。そんな夢野久作に「土着思想や近代の政治学を託すのはいささか無理」がある。「上村とニーナの向かう先はかならずしも日本とはかぎらず、辿りつくべき『目的地』は「……だつたらドウスル?」「宙吊り」にされている以上、「回帰」ではない。「どこにも行き着かない出発」なのだ、と種村は述べる。

「氷の涯」への出立を「どこにも行き着かない出発」とする種村の指摘は極めて重要なものである。テキストが凍結した海上に

出立する手前で終わっている以上、「僕」と「ニーナ」の向かう先は日本とは限らない。どこに向かうか分からない運動性を秘めたままテキストは幕をとじるのだ。本稿は、種村の「どこにも行き着かない出発」を引き受け、テキストに考察を加えていく。

しかし、本稿では、「土着思想や反近代の政治学を託すのはいささか無理」がある、という立場はとらない。種村論、および前掲の水澤論は、結末部の美しさから、国家・政治を切り離してテキストを検討しているが、そうした力学からの鮮やかな「逃走」こそが、「水の涯」の結末部を形成しているのであり、たとえ美しさを読み取るにしても、テキストに描きこまれた国家・政治を改めて検討しなおす必要があるのだ。

また、種村は「ジブシー娘ニーナと道連れでいて土着や回帰を云々するなど土台無理な話なのである」と論じているが、本稿では逆の立場をとる。結論をさきに述べれば、ニーナの逃走が国家・政治といった力学を掻きまわし、最終的には「一直線」に切り裂いていく様がテキストに描かれていると考える。

本稿^③で問題にしたいのは、友人から聞いた話や大量の資料によって構成されるテキストに、作家夢野久作は何を描きだしたかということだ。そのさい注目したいのは「ジブシー娘」ニーナという存在だ。

2-2-1 ナの変装術

「僕」は共に逃亡生活を続けているニーナについて「馬鹿々々しい話だが彼女が平生、何を考へて居るのか、彼女の人生観がド

ンナものなのか、全く見当が付かないのだ」と記す。「僕」は、長期間の「漂流生活」を経た大正九年という物語現在時においてもニーナのことが分からない。このことは、たとえば次のような記述からも窺い知ることができる。

性格はわからない。異人種の僕には全くわからないのだ。

馬鹿々々しい話だが彼女が平生、何を考へて居るのか、彼女の人生観がドンナものなのか、全く見当が付かないのだ。ただ是非とも僕と一緒に死に度いと云ふから承知してゐるだけの事だ。さうして此手紙を書いて終ふまで死ぬのを待つて呉れと云ふと簡単にうなづいただけで、すぐに落ち着いて編物を始めて居る女だ。だから僕には解らないのだ。

死ぬ間際まで平気で編物をしてゐる女……。

すこし脱線したやうだ。

(略)

又、脱線しかけた。

注目すべきはニーナについて語ろうとすればするほど、「僕」の話が「脱線」するということだ。「わからない」存在だからこそ、言葉を尽くして説明しようとするが、説明しようとするほど余計に「わからない」話になる。このように、ニーナについて語ろうとすると「僕」の話は「脱線」し続けていく。

だがニーナのことがわからないというのは「僕」に限った話ではない。日本軍司令部に居る兵隊たちは、「あれあタ々の女ぢや

ないぜ」と言うが、「ドンナ意味の只の女ぢや無いかを知つて居る者は一人も居な」と語られるし、ニーナを養女として迎え入れていたオスロフもまた、ニーナによる日本軍の軍規漏洩という「いたづら」に気付くことがないまま、テクストの表舞台から姿を消すことになる。また、指令に基づき「哈爾濱の掻きまはし計画」をたてていた赤軍も、「首領株とおんなじに信用」していたニーナが「赤軍のスパイ網を、根こそげ日本軍にブチ撒け」ることによって、日本軍に「根こそげ退治」される。誰にとつても、想定外の埒外にいる存在、それがニーナだ。

本章では、テクスト内におけるニーナの描かれ方を通して、その思考のあり方について考察していきたい。結論を先に述べれば、ニーナの思考のあり方とは、身の周りにあるものを即興的に利用していくことである。それはラストシーンにおいて、「僕」とニーナを凍結した氷上という「ドウなつてゐるか誰も知らない」世界―「氷の涯」へと導くものだ。

まず、テクストにおいてニーナが初めて登場した場面を確認しよう。

ことわつて置くがニーナは決して別嬪では無い。コルシカ人とジプシーの混血児だと自分で云つてゐるが、其せゐるか身体が普通よりズツト小さい。濃いお化粧をすると十四五位にしか見えない。それでゐて青い瞳と高い鼻の間が思ひ切つて狭い細面で、おまけに顔一面のヒドイ雀斑だから素顔の時は、どうかすると二二三に見える妖怪だ。ほんとの年齢は十九ださうで、ダンスと、手芸と、酒が好きだといふから彼女の

云ふ血統は本物だらう。

引用部において語られているのは、「僕」の驚きだ。たった化粧一つで、「二二三に見える」女性から「十四五位にしか見えない」少女へと変身するニーナの魔術、その力を目の当たりにしたとき、「僕」はニーナを「妖怪」というのである。

ニーナのそうした変装術は、オスロフ一家を尋問しにやってきた憲兵の哀れみを誘うことによつて「審問」を「中絶」させたり、また、ウラジオストクまで追いかけてきた「二人の日本人紳士」の目を欺いたり、幾度も彼女の命を救つてきたものとして描かれている。

変装という問題について、シベリア平原を「漂流」する場面は極めて重要だが、まず、ニーナの来歴をみていき、その即興的なありようを確認していきたい。ニーナは「落魄した両親」に「売り飛ばさ」れ「ネルチンスクから上海」へと向かう途中、「無頼漢」の手によつて誘拐されハルピンへと連れてこられた。その手から抜け出したニーナは、偶々向こうからやってきたオスロフの「首ツ玉に飛付」き「お父さん……」と出鱈目を絶叫した。ことによつて気に入られ、その養女となつたという。

このようなニーナの逃走が、計画的であつたはずもない。ただり着くべきだつた「上海」には行き着かず、偶然ハルピンに連れてこられたニーナは、偶々やって来たオスロフを利用することによつて、無頼漢の手から抜け出し「オスロフの養女」という地位を得た。こうしたニーナの性質は、レヴィイストロースが『野生の思考』で論じた「プリコラージュ」の概念が助けになる。

器用人は多種多様の仕事をやる事が出来る。しかしながらエンジンニアとはちがつて、仕事の一つ一つについてその計画に即して考案され購入された材料や器具がなければ手を下せぬというようなことはない。彼の使う資材の世界は閉じている。そして「もちあわせ」の内容構成は、目下の計画にも、またいかなる特定の計画にも無関係で、偶然の結果でできたものだからである。すなわち、色々な機会にストックが更新され増加し、また前にものを作ったり壊したりしたときの残りもので維持されているのである。したがって器用人の使うものの集合は、ある一つの計画によって定義されるものではない。

レヴィイ・ストロースの唱える「プリコラージュ」は、「もちあわせ」の道具でもって目的を達成するために即興的に織り上げる思考形態である。しかし、「プリコラージュ」の思考形態は、手段と目的が一致するような、計画的なものではなく、「偶然」の機会によって得たストックを、即興的に本来の使用用途とは異なる形で利用するものだ。ニーナはハルピンに連れてこられたころから、このような思考形態を持っていた。

また、彼女が「コルシカ人とジプシーの混血児」であるということにも注目したい。ニーナは、当初赤軍のスパイ活動に手を貸していたが、日本兵の「僕」を見始めるとすぐさま鞍替えをして、容易に自らの立場を変える。そして、時には色眼鏡をかけた「支那人」、また時には「モンゴル生まれのナハヤ・ガルスキー」と

いう踊り子になりすますなど、自らの「混血児」という出自を巧みに利用することで、自らの身を守り、地位を得てきた。そのため、国籍や言語はニーナにとって自己同一性を確認するための指標などであろうはずもなく、我が身を守るための「もちあわせ」に過ぎない。

このようなニーナの性質を「プリコラージュ」と結び付けて考えてみれば、彼女は「混血児」であるという自らの出自を巧みに利用していることが分かるだろう。

以上の点を踏まえたうえで、シベリア平原を「漂浪」中にニーナがほどこした変装について確認しよう。

食事が済むと彼女は飲料水を全部バケツにブチマケて、片手で固練白粉を溶きながら、首から上を気味の悪いほど真白に塗り上げた。それから細長い情熱的な眉を引いて、唇を赤黄色いベニガラ色に染め付けると、今度は僕を丸裸体にして、黒い支那服じみた奇妙な格好の古いダブ／＼服を着せた。それから軍服と兵隊靴を、ブーツの下に突込むと、代りに古い赤革のゲートル靴を穿かせて、鏢の広い、黒い、伊太利風のお釜帽子を冠せて、大きな色眼鏡をかけさせて、それから食料とお金と、化粧道具と、ピストルを納めた上に、僕の雨外套と、毛布と、飯盒を結び付けた露西亞式古背囊を、僕の肩に載せかけて、一番最後に巨大な新しい手風琴を渡した。

この場面こそ、先に述べたニーナの魔術的変装術と、「プリコラージュ」の思考形態が合致した瞬間である。「支那服」や「伊

太利風のお釜帽子」、「飯盒を結び付けた露西亜式の古背囊」といった服装に刻み込まれた国家の痕跡は、ニーナの手によって組あわせられることよって、「僕」は「ザバイカル生まれのボヂイ、ガルスキー」という全くの別人へと、作り変えられる。ニーナのこのような力が追ってくる「日本軍」「白軍」「赤軍」という国家・政治の力学からの逃走を可能にするのだ。

さて、前掲の種村論において、辿りつく「目的地」は「……：だつたらドウスル？」と「宙吊り」であると論じられていた。しかし、身の周りのものを即興的に利用することよって、危機的状況を切り抜けてきたニーナにとって、逃亡先は常に交換可能である。「目的地」は「宙吊り」ではなく、そもそも存在しないのだ。当初、日本への逃亡を予定していたニーナは、モーターボートがダメになれば行き先を上海に変更し、上海もダメとなれば針路を「水の涯」の世界へと向ける。針路をその場の状況よって作り上げるニーナの行き先は、誰にも、ニーナ自身でさえも分からぬのだ。

3 「ゴヂヤ〜」にされるもの

前章では、ニーナの変装という点に注目し、そのあり様を「ブリコラージュ」という概念を援用して考察した。本章では、前章と通底する問題を、ニーナの「編物」を手掛かりに論じていく。

ニーナが「編み棒をゴシヤゴシヤにして笑いこけ」る様にいち早く注目し、指摘したのは川崎賢子である。川崎は、「ホモジニアスなエロス性」に基づいた「家族的集団」におけるユートピア

の「生活」の極限状態として「戦争」が捉えられ、そこから観念的に生み出される「美」が「のがれがたい円環をかたちづくる」こととなると指摘する。このような「ホモジニアスな物質的想像力が結晶した絶対戦争のイメージである水の世界」が、「日本」へと「続いていたら」と空想する「僕」の言葉は、終わりになく続く「戦争」の円環構造を再構築してしまう。しかし、ニーナの「笑い」によつて無化され円環は断ち切られる。ニーナの「笑い」が、「ノンセンスの場所」を生み出すとき、「しかしアンタと二人なら大丈夫よ」というニーナの楽観的な言葉が再帰的に呼び起こされ、「ノンセンス」の「美」の世界が生み出されることとなるだろう。このような川崎の指摘はニーナの編棒とテキストそのものを連関させ、円環構造とそれを切断するニーナの姿を論じた極めて重要な指摘である。

しかしながら、ニーナは「編み棒をゴシヤゴシヤ」にするだけではない。テキスト後半部において「寄せ糸で編んだハンドバッグ見たやうなものが出来上がりかけてゐる」と記されるように、何かを編み上げる存在でもある。

川崎は、「編み棒でゴシヤゴシヤにして」織りなされ、もの語りつづけられたテキストを「ゴシヤゴシヤに」すると論じた。しかし、本稿で注目したいのは、テキスト内においてニーナはいかに表象されているか、何を編み上げ、そして何を「ゴヂヤ〜」にしたかという問題である。

本稿の理解において、ニーナが編み上げたものの一つに挙げられるのは、国籍や出自、主義主張もとりに混ぜて作りあげる「関係」である。先にも論じたようにニーナは身の回りのものを即興的に

利用することによって、地位を得てきた存在だ。それは、例えば「主義とか思想とか云ふものは大嫌ひ」にも関わらず、「哈爾賓の赤軍」のなかで「首領株とおんなじに信用されて」いたということからも分かるだろう。無論ニーナは、権力からもたらされる甘い汁を期待して、そのような地位を得たのではない。赤軍のメンバーの一員「アブリコゾフ青年」に惚れていたためであり、また「持つて生まれた冒険癖」のためでもある。

だが、このようにして、ニーナは編み上げてきた人間関係をいともたやすく「ゴチャ／＼」にする。アブリコゾフが赤軍の秘密をアッサリばらしたことを知ると「あんな意気地なしの檻樓男とは夢にも知らなかつた」と言つて愛想をつかし、すぐに「日本の軍人の中」で「一番好きになつちやつた」僕を救うため、モーターボートに乗つてハルピンから脱出する。その途上、「自然烈度くなつたから」といつて「赤軍のスパイ網」を暴露して壊滅に追い込むのだ。ニーナの立ち去つた後には混乱だけが残されていく。

次にニーナが何を「ゴチャ／＼」にしたか、という問題について考察を深めるために、ウラジオストクの酒場で練り広げられるニーナと「二人の日本紳士」の会話場面を引用する。

「アハハハ。見たまへ君。断髪だらう。ソバカスは解からないが、年頃もちやうど似通つてゐる。……ネエ。さうぢやないかナハヤさん。君は一体いつなんだい」

と其の紳士が上手な露西亞語で尋ねた時には、流石のニーナも身体中の血が凍つたかと思つた。お化粧をしてゐなかつ

たら直ぐにも顔色を看破られたであらう。

(中略)

相手の年老つた方の紳士はトロンとした瞳をニーナの真正面に据ゑながらゲラ／＼と笑つた。手の甲で鼻の下をコスリ上げ／＼、寛束ない露西亞語で怒鳴つた。

「……オイ。娘つ子、貴様の名前はニーナつて云ふうんだらう。……隠すと承知せんぞ」

モウ度胸のきまつてゐたニーナは莞爾とうなづいて見せた。ハツキリとした日本語で答へて遣つた。

「え、さうですよ。日本語でニーナ。露西亞語でオイシイ、ウキスキー……」

この場面において「ゴチャ／＼」にされているのは、コミュニケーションそのものである。日本紳士はニーナに「露西亞語」でもつて詰問する。それはニーナが「露西亞語」話者であるという認識に基づいている。しかし、ニーナは即興的に相手の言語「日本語」を駆使して反撃する。「露西亞語」という共通のコードを使ったコミュニケーションを拒否するのだ。さらに「貴様の名前はニーナつて云ふうんだらう」という一個人を特定する為の問いに対して「え、さうですよ。日本語でニーナ。露西亞語でオイシイ、ウキスキー……」と答えることで、問いに答えただけではなく、問いの文脈を「ゴチャ／＼」にする。

さらに、この場面で注目したいのは、ニーナのソバカスと言語がニーナ一個人を特定する為の記号として機能している点だ。「二人の日本人紳士」は、「ソバカス」や「露西亞語」という記号を

用いることによって、ニーナとそうでない者の区別をつけようとするのである。

記号という問題に注目すると、テキストのいたるところに記号が顔をのぞかせていることがわかる。例えば十梨通訳が憲兵に差し出した一六枚の「二十円札」は、裏面について「赤インキの斑点」によつてもとは星黒主計の俸給であったことが特定される。

「赤インキの斑点」という記号によつて、盗まれた公金十五万円と星黒主計の俸給とが区別されるのである。

そのように考えれば、ハルピンで繰り返された「日本軍」「白軍」「赤軍」の権力闘争において、如何にして相手に記号を張り付けるかが重要な戦略だった。「赤軍」が「日本軍」に出した手紙によつて、オスロフ一家は殺害される。「白軍」のなかにいる「赤」、味方のなかにいる敵、「赤軍」の戦略は、相手の圏内に差異を作り出し、同士討ちさせるものであった。

ここで本章の問題、ニーナが何を「ゴチャ／＼」にしたかという問題に戻ろう。ハルピンでの権力闘争を「コンナ危なつかしい馬鹿々々しい鬼ゴツコ」というニーナは、松花江に浮かぶボートの上で次のように言う。

……妾は主義とか思想とか云ふものは大嫌ひだ。チツトも解らないし面白くも無い。「理屈を云ふ奴は犬猫にも劣る」つて本当だわ。

……妾には好きと嫌ひの二つの道しかないのだ。妾は其中で好きな方の道を一直線に行くだけだわよ。

(中略)

……妾はブルジョアでもプロレタリアでもない。だからブルジョアでもプロレタリアでもなく構はない。

ニーナが「妾はブルジョアでもプロレタリアでもない。だからブルジョアでもプロレタリアでもなく構はない」ということは、他者から如何に規定されてもかまわないということだ。

「主義とか思想とか云ふもの」を厭うニーナにとつて、大事なことは「妾」が「好き」か「嫌ひ」かということだけだ。また、それは2章でも触れた逃亡先と同じく、交換可能なものだ。ゆえに、アプリコゾフを好きでいる間は「赤軍」に協力していたし、彼を嫌ひとなれば、あっさり切り捨て、「日本の軍人の中」でも「一番好きになつちやつた」た「僕」を連れてハルピンから逃げ出す。

「ブルジョアでもプロレタリアでもない」ニーナは、自分が「好き」になったものの為ならば、「ブルジョアでもプロレタリアでもなく」でも何にでもなれる。それまでは「好き」なものであったとしても、「嫌ひ」になったとなれば、あっさりと振り捨てることができる。ハルピンで権力闘争を繰り返してきた「日本軍」「白軍」「赤軍」は国家・政治闘争の枠組みで人を規定してきた。また「僕」は、ハルピンで起こった事件を権力闘争の枠組みで推理してきた。「白」か「赤」か、敵か味方か。だからこそ「好き」か「嫌ひ」かという即興的な基準を理由に「白」や「赤」、「敵」や「味方」へと容易に立場を変えるニーナのことか理解できない。

ニーナはこのようにして、自分達から区別された彼ら、味方から区別された敵、といった国籍や主義主張で区別された記号体系

を「ゴヂヤ〜」にし、混乱を呼び込むのだ。

4 「氷の涯」の世界

原暉之⁵⁾は、シベリア出兵および当時の国家の欲望を以下のよう
に述べる。

一九一七年のロシア十月革命が現代世界に及ぼした衝撃と
波紋の大きさを思うとき、この革命に対して世界大の規模で
諸列強が引き起こした干渉戦争のもつ意義を低く見ることは
できないであろう。列強は連合して革命ロシアに襲いかかり、
これを包囲し、反革命政権に支援を与え、ソビエト政権の崩
壊を狙うとともに、国際場裡におけるそれぞれ自国勢力の伸
張を図った。シベリア出兵と呼ばれるのは、この連合国軍事
干渉のうち、ロシア東部辺境地域を舞台とするものを指す。
その主力を担っていたのは日本である。

原が述べるように、シベリア出兵では、各国の思惑が交差し、
絡みあっていた。テキストは、そうした国家間の闘争を背景に展
開する。各国は「それぞれ自国勢力の伸張を図」るため、シベリ
アという空間に兵士を送り出していく。その玄関口となったのが、
「僕」とニーナが「漂浪」の末たどり着いた湾口都市―ウラジオ
ストクであった。

夢野久作は大量の資料をもとにテキストを描いた。テキストに
おいて、ウラジオストクが描かれるのは、冒頭と結末部という全

体から見ればわずかな分量であるが、夢野久作が集めたウラジオ
ストクに関する資料は数多く残されている。福岡県立図書館郷土
資料課には夢野久作が残した資料として、兵器工廠、街を行進す
る兵士(図1)等の絵葉書等が所蔵されているが、その中でも特
に注目したいのは、「浦港警備中の日英米支軍艦」(図2)と書か
れた絵葉書だ。そこには港湾にひしめき合う、諸各国の軍艦、国
家・政治が絡み合う空間が写されている一方、同時に、茫洋たる
海へと続く道、港湾の出入り口も見える。夢野久作はこうした国
家・政治がひしめき合う場所で「氷の涯」をイメージしたのだ。
「僕」とニーナはそのような空間から凍結した洋上へ、「氷の涯」
の世界へと迂り出していくのである。

本章では、夢野久作が視覚的資料を用いて描いたテキストのラ
ストシーンに注目することで、「氷の涯」への出立が何を意味す
るかを考察する。

テキスト後半部、逃走を続けてきた「僕」とニーナは、ウラジ
オストクにおいて、「二人の日本紳士」、そして「ボルセビキの
密偵」である「ムカツツイ」に追いつめられていることを知る。
ニーナの変装術、即興性を持ってしても逃れられない、国家とい
う非常に強力な枠組み。しかしニーナはここで、凍結した海の上
に迂り出すという「ステキな死に方」を提案することによって、
世界を覆い尽くす国家・政治の力学からの逃走を計画する。

佐藤泉は「アジア主義の夢の形―夢野久作の想像力」におい
て、「夢野久作が父親を通して受け継いだのは大陸ロマンや右翼
美学の類ではなく、アジアと世界の空間意識、そして相互に焦点
のずれた夢がそれでもなお同一の大地(地表)に重なりあう感覚

ではなかったか」と論じ、「氷りついた夜の海へと走り出していく死のイメージがこの上なく美しいの」は、「僕」とニーナという「二つの固有の世界」が「永遠に交差しない」まま、「理解しつくせない残余がどこまでも残され、けれどそれで一緒に死ぬにはさしつかえない」からだと言指する。

国家・政治が個人を規定してくるのに対し、「僕」とニーナは「わかりあったりなどしない、理解を強いこともない。凍結した氷上には「二つの固有の世界」の軌跡が「パラレルな線」として刻み込まれる。

佐藤の指摘を踏まえようと、ラストシーンを見ていこう。

僕らは今夜十二時過に此の櫓に乗って出かけるのだ。先づ上等の朝鮮人参を一本、馬に嘔ませてから、ニーナが編んだハンドバッグに、やはり上等のウキスキーの角瓶を四五本詰め込む。それから海岸通りの荷馬車場場の斜面に来て、そこから凍結した海の上に江り出すのだ。ちやうど満月で雲も何も無いのだからトテモ素敵な眺めであらう

(中略)

ニーナは哈爾濱に居るうちにドバンチコから此話を聞いてゐたさうで、そのドバンチコは又、或る老看守から伝え聞いて居たものださうだが、大抵の者は途中で酔ひが醒めて帰つて来るさうである。また年寄りの馬はカンがい、から、櫓の上の人間が眠ると、直ぐに陸の上へ引返して来るさうで、その為に折角苦心して極楽往生を願つた脱獄囚が、モトの牢屋でタ、キの上で眼を醒ました事があるといふ。

「……しかしアンタと二人なら大丈夫よ」
と云つて彼女が笑つたから僕は此のペンを止めて睨み付けた。

「若し氷が日本まで続いて居たらドウスル……」
と云つたら彼女は編棒をゴヂヤ／＼にして笑ひこけた。

「僕」にとつての「氷の涯」への出立とは、文字通り「ステキな死に方」だ。ニーナの提案を聞いた「僕」が真つ先に始めたことは「病氣も何も忘れて此の遺書を書き始め」ることである。死という目的に向かつて紙上にペンを走らせる「僕」にとつて、「氷の涯」への逃走計画が絶対に失敗できないものであることは、「……しかしアンタと二人なら大丈夫よ」と、あまりにも樂觀的だとれる発言をするニーナを睨みつけることから窺われることだろう。その際、「僕」がニーナに向かつて「若し氷が日本まで続いて居たらドウスル……」というのは重要である。

杉田敦は『境界線の政治学 増補版』において、次のように論じる。

人間の群れについての境界線が引かれるのは、その範囲内の人々にもつぱら関心を寄せるためである。この場合、関心は二重の意味において寄せられる。「一方で、その範囲内の人々は、群れの一部ないし全体のために動員され利用されるということを意味している。国民のために、人々は労働し、納税し、時には従軍しなければならぬ。人々は、特定の言語とそれにもとづいた文化を受け容れるよう、直接・間接に誘導

される。

「僕」は「群れの一部ないし全体のために動員」された「一等卒」である。テクスト冒頭において自身を「現在、哈爾濱駐劄の〇〇〇團司令部に所屬してゐる意気地の無い一等卒」という「僕」には、特に「境界線」を画定する力が強く働いているということができらるだろう。人が個人として生きる以上、「境界線」からは逃れられない。国家・政治が規定する「境界線」を越え、その力学から逃れたところで、また別の国家・政治が「僕」という個人を捕え、規定する。だから「僕」は、海中に没することによって、自らの身体をこの世から消すことによつて、国家・政治の力学から逃れようとしたのだ。

「ステキな死に方」の話は、「僕」にとつて、国家・政治の力学から逃亡するための方策であり、「僕自身の心臓の鼓動」を「全然生れ変わった様」に感じさせる、特別なものであった。しかし、「水の涯」への出立を語るニーナ自身は、極めて「無造作に云」う。ニーナにとつて「水の涯」への出立は、これまでの行動の延長線上にあるものだからだ。「水の涯」の話は、彼女を世話していたドバンチコという「掃除人」から「哈爾濱に居るうち」に、偶然聞き及んでいたものだ。本稿で確認してきたように、ニーナは身の周りのものを即興的に利用することに長けた存在である。その即興性は、国籍や主義主張によつて作り上げられた記号体系に従う者達を混乱させていく。ニーナの逃走は、自身の意図と関わりなく、「境界線」を引く側にも前提とされている「特定の言語とそれにもとづいた文化」を混乱させるのだ。

「極楽往生を願つた脱獄囚が、モトの牢屋でタ、キの上で眼を醒ました事がある」という失敗談を聞いて、決断を迷う「僕」に對し、ニーナは「……しかしアンタと二人なら大丈夫よ」と根拠のない発言をする。この決断こそニーナを「水の涯」へ向かつて駆動させるものであり、それは「好きな方の道を一直線に行く」という力学だ。ニーナの前には「好きと嫌ひの二つの道」しかなく「其中で好きな方の道を一直線に行く」為には、命懸けで行動する。しかし、一度「嫌ひ」となれば、アブリコゾフを捨て、「日本の軍人の中」で「一番好きになつちやつ」た「僕」と共に命懸けの逃避行へとくり出して行く。ニーナにとつて最終的な目的地などどこにもない。重要なのは、これまで歩んできた軌跡そのではなく、「好き」な方の道を「一直線」に進むという運動そのものなのだ。だからこそ「僕」と違い、ニーナはテクストの初めから終わりまで、「好きな方の道を一直線に行く」運動に迷いを生じさせることはないのだ。

最後にタイトルでもある「水の涯」とは何か、という点について考察したい。本稿では「水の涯」がニーナそのものの隠喩として描かれていると考える。

濃いお化粧をすると十四五位にしか見えない。それであて青い瞳と高い鼻の間が思ひ切つて狭い細面で、おまけに顔一面のヒドイ雀斑そばかすだから素顔の時は、どうかすると二十三三に見える妖怪だ。

先にも論じたように、ニーナの「雀斑」は、国家・政治が彼女

一個人を特定する為の記号として機能している。「雀斑」は酒によって「消え薄れ」はするものの完全に消え去ることはない。しかし、その上から真つ白な「濃いお化粧」を施すことによって、ニーナは「雀斑」を塗りつぶす。また「青い瞳と高い鼻の間が思ひ切つて狭い細面」とあるように、両の目を間を切り裂くようにして「一直線」に「高い鼻」が通っている。つまり、凍結した海とは、個人を規定する国家・政治の力学を「好きと嫌ひの二つの道」によって塗りつぶした世界である。そのなかで、ニーナは「好きな方の道」を「一直線」に進むことによって、国家・政治が作りあげた記号体系を切り裂き、「ゴチャ／＼」にするのだ。

またラストシーンで、ニーナの発言が「遺書」を書き進めてきた「僕」の「此のペン」を止めることは重要だ。テキストの結末部は「遺書」に書かれたことなのか、それとも現在進行形で話しているのか分からない、あいまいな時空間である。テキスト冒頭「僕」が話を「脱線」させたように、ニーナは結末に向かうテキストを「脱線」させ、その運動性がどこに行くのかを分からないままにする。このように考えれば、ニーナの運動は、ただ国家・政治の力学を切り裂くのではなく、切り裂き続ける可能性として保持されるものとなる。ニーナが語る「水の涯」の世界は「真珠のやうな色」から「虹のやうな色」へ、さらに進むと「真黒く見えて来るが、それから先は、ドウなつてゐるか誰も知らな」いというが、それは、何者でもないがゆえに何者にも変化し続けるニーナを端的に示す表現ではないだろうか。「水の涯」の世界とは、ニーナの運動性そのものの隠喩なのだ。

夢野久作が「水の涯」に描いたものとは、何者へも変化し続け

るニーナの運動が、国家・政治の力学を引き裂き、ついには「ドウなつてゐるか誰も知らな」い地平を切り開く様なのである。

注

- (1) 江戸川乱歩「夢野久作氏とその作品」『探偵春秋』春秋社一九三七年五月号
- (2) 中村河太郎・谷川健一編「夢野久作への私的アプローチ」『夢野久作全集7』三一書房 一九七〇年一月
- (3) 西原和海「解題」『夢野久作全集6』筑摩書房 一九九二年三月
- (4) 初出は「新青年」博文館 一九三三年二月号
底本は同年四月に所収された『水の涯』春陽堂 一九三三年四月（国立国会図書館デジタルライブラリー書誌ID: 00000610755）を使用した。底本は総ルビだが、本稿では適宜省略する。
- (5) テクスト冒頭「遺書」を除き、全て「ゐしよ」というルビが振られている。以下の引用は全て「ゐしよ」
- (6) 鶴見俊輔「ドグラ・マグラの世界」『思想の科学』思想の科学社 一九六二年一〇月号
- (7) 由良君美「狂乱の外界と意識下の夢に憑かれて―ひとつの解説」『日本探偵小説全集』4 夢野久作集 東京創元社 一九八四年一月
- (8) 多田茂治「戦争の惨毒のなかで」『夢野久作読本』弦書房 二〇〇三年一〇月
- (9) 水澤周「夢野久作の一断面」『大衆文学研究』南北社 一九六四年五月
- (10) 種村季弘「解説 逃走のトポロジ」『夢野久作全集6』前

掲

- (11) 「極東の少女／少女の極東 夢野久作少女紀行」『ユリイカ』
青土社 一九八九年一月
- (12) 佐藤泉「アジア主義の夢の形―夢野久作の想像力」
『KAWADE 夢ムック 文芸別冊 夢野久作あらたなる夢』
河出書房新社 二〇一四年二月
- (13) 「氷の涯」におけるハルピンの都市表象や、書簡体系式にも
かかわらず挿入される十梨通訳とニーナの長い語りといった問
題は重要な問題であるが、紙幅の都合上、それぞれ別稿を期し
たい。
- (14) クロード・レヴィ・ストロース著 大橋保夫訳『野生の思考』
みすず書房 一九七六年三月
- (15) 原暉之『シベリア出兵―革命と干渉 1917―1922』筑摩
書房 一九八九年六月
- (16) 杉田敦『境界線の政治学 増補版』岩波書店 二〇一五年一
二月

(のさく ひろたか 本学大学院博士後期課程)

付記1

西川貴子の指摘（「虚構都市〈哈爾濱〉の〈混沌〉」――
夢野久作「氷の涯」における建築表象）『建築の近代文学
誌』勉誠出版 二〇一八年一月）は、本稿の問題意識の
多くと重なるが、論が校正段階であった為、取りあげるこ
とができなかった。

付記2

資料の調査・掲載に際し、杉山満丸氏および福岡県立図
書館杉山文庫にご協力頂いた。厚く御礼申し上げます。

図1 「浦塩に於ける米軍の行進」



図2 「浦港警備中の日英米支軍艦」

